

シェム・リアップ事情

荒樋久雄

アンコール遺跡のお膝元

私の住む町、シェム・リアップは、世界遺産であるアジアの至宝、アンコール・ワットの玄関口に位置する。アンコール遺跡は東南アジア最大級の遺跡群で、東京 23 区がすっぽりに入る広大な地域に、9 世紀から 13 世紀に建立された 100 以上の遺跡が林立する。そして、この遺跡群を訪れる観光客が必ずといってよいほど逗留するのがこのシェム・リアップの町である。

とはいっても町の中には遺跡はなく、街並みはローマやアテネなど世界の他の歴史都市に見られるような「古代の遺産」と「現代の街並み」が複合して建ち並ぶ風景とは趣を異にする。もつとも古い建物でも、フランス統治下の 20 世紀初頭に建てられた、いわゆる「コロニアル・スタイル建築」である。シェム・リアップは、歴史から忘れ去られ、密林に埋もれてしまった王都アンコールに代わり、近代に入って、カンボジア国内交通の要衝の地として、また遺跡観光の町として、整備、発展してきたと思われる「新興の町」と言ってよいだろう。



ところで、この地域の歴史を振り返ると、シェム・リアップを含むカンボジア北西部 3 州は、アンコール王朝の衰退後、台頭してきた新興勢力のタイによって幾度か征服され、1795 年から 1907 年までタイ領となっていた経緯がある。今なお、通貨、習慣などにタイの影響が垣間見られる。私たちが当然のことにようにカンボジアの遺産だと思っているアンコール・ワットも、実は、長い間、タイ領内にあり、タイの文化遺産と見なされていたのである。

街中、そしてプサー（市場）

町の規模はカンボジアの中でも 5 ~ 6 番目、人口も約 7 万人と小さな町である。しかし、近年のアンコール遺跡観光がにわかに脚光を浴び、ホテル、レストラン、バー、ナイトクラブなど華々しい看板やネオンに飾られた建物が、ここ数年、瞬く間に建設されている。

国際観光都市に変貌しようとしているシェム・リアップには、ラッフルズやソフィテルなど海外大型資本が相次いで進出し、内部に一步足を踏み込むと、カンボジアであることを忘れるような贅を尽くした内装の巨大ホテルも出現している。料理にしても、地元カンボジア料理以外に、フランス、イタリア、タイ、中国、インド、日本、韓国など世界各国の料理を味わうことができる。シェム・リアップは、未だ、後進的な状態にあるカンボジアの他の地方都市とはまったく異なる別天地である。

街は人と乗り物で混み合っている。とくに朝夕は、車、バイク、自転車が道路に溢れ、中心部は交通無法地帯となる。また二つの市場 プサー・チャー（直訳すると「古い市場」）とプサー・



ルー（同「上級市場」）は、いつも活気に満ちている。とくにプサー・チャー周辺は、観光客相手の土産物屋やレストランなどがひしめき、人通りも多く賑やかである。雑貨、衣料、日用品、調味料、生鮮食品などが所狭しと並べられている。ここでカンボジアの人びとの日常に必要なものすべてがそろふ。足を運べば、活気に満ちた売り子の声とともに、カンボジアの心地よい「喧騒」をひしひしと感じとることができる。



様々な野菜や果物が、コンクリートの床に敷かれたゴザの上に、うずたかく盛られている。冷蔵庫の普及していないカンボジアでは、豚や鶏の肉片やソーセージなどは、そのまま壁にぶら下げられている。そして雨季には琵琶湖の数十倍にもなる大湖トンレ・サップよりもたらされる豊かな恵が市場の床の上をピチピチと跳ね回り、目の前でさばかれ、売られる。魚はカンボジアの特産品である。干物や「プラホック」と呼ばれるカンボジア料理には欠かすことのできない醤油のような調味料（いわゆる「魚醤」）に加工され、人びとの日々の食卓に上がる。



ここシム・リアップに住み始めてかれこれ4年が過ぎた。一時帰国などで日本へ帰り、東京などの大都会へ行くと、都市のスケールの大きさに圧倒され、自らの居場所探しに腐心する。それに対して、この町のスケールは、自分の目で事情を見通すことのできる、人間の尺度に見合ったちょうどよい大きさである。一人当たり国民総生産が300ドル程度と、世界の最貧国の一つであるカンボジアの、その小さな町であるにもかかわらず、居心地は非常に快適で、生活するのに困

ることはない。（ちょっと医療事情は良くないが.....）。実にさまざまなものが凝縮され、コンパクトに納まっている。

わが家

私の住まいは、町の中心部に位置するワット・ポー寺院の近くにある、コンクリート造りの平屋建て5軒長屋の南端である。カンボジアの一日の始まりは早い。夜明けと共に一斉に人々は動き出す。私も毎日、隣家の庭掃除や朝食の支度の音で起こされている。音と言え、カンボジアの冠婚葬祭は賑やかである。家の前に仮設の建物を建て、そこで来訪者をもてなすのだが、その際、巨大スピーカーのヴォリュームを一杯に上げ、音楽を延々と流す。式の存在を隣近所に知らせるためだそう。近くで冠婚葬祭があろうものなら、朝5時頃から賑やかな音楽が聞こえ始め、それで叩き起こされることもある。

家賃は1ヶ月110ドル（約1万4千円）。カンボジアの一般の人にとっては少々高い。それでも

外国人、日本の政府関係者や政府関係の仕事をしている人々が入っているところの家賃と比べると雲泥の安さである。そこに2年前、有線放送を引いた。1997年7月の軍事衝突のとき、カンボジア国内放送はまったく機能を停止し、在留日本人にとってNHKテレビが大きな情報源となった教訓もあったからだ。わが家でNHKテレビを見られるようになったときには本当に感激した。今の私の朝は、NHKの朝の連続テレビ小説を見て、それから出勤する日々である。

カンボジアらしさ

ここまで書くと、皆さんがイメージしている「カンボジア」とは、かなりかけ離れたものを感じるかもしれない。私が「カンボジアに住んでいる」ということを日本の人に話すと、なかには高床式の草葺きの家に住んでいるようなイメージを持つ人もいる。ともかく、カンボジアというと、長く続いた内戦、ポル・ポト時代の大量虐殺、地雷、そして貧困など、暗いイメージが浮かんでくるらしい。しかし、今のカンボジアには少なくとも表面的にはそのような「陰」は見受けられない。



この「陰」をいつまでも追いかけているのは、既成のイメージの上塗りを繰り返すマスコミなどの人びとである。そして、そうした姿勢を許し、助長しているのは、そうした情報を無批判で受け入れている「私たち」なのかもしれない。

カンボジアはアンコール遺跡に象徴される壮大な文化・文明を生み出したものの、その後は苦難の道を歩んできた。15世紀のアンコール王朝の衰退以降、長年にわたって台頭するベトナムやタイなどの隣国の脅威にさらされ、タイ領となり、そしてさらにフランスの植民地となった。1953年に独立を果たしたものの、その後、長い内戦に突入してしまう。こうした状況では、自国の文化的土壌を育むことが困難であったことは想像に難くない。そしてそれが、他の東南アジア諸国が目覚しい経済発展を遂げる中で、大きくカンボジアが立ち遅れる要因にもなっている。しかし、「カンボジアの微笑」と椰楡されてはいるが、人びとは非常に温厚で実直である。国土は肥沃で、文化遺産・自然遺産にも恵まれた素晴らしい国であり、今後の発展と共に、私たちが抱く「カンボジアらしさ」も良い方向に塗り替えられていくことだろう。

(『新建築』2001年7月号 一部加筆修正)